

地霊の復権

野本寛一著

洞窟や奇岩、天空に突き抜ける巨木、旅先で出会うと、信仰心もないのに神々しい感じにうたれる風景。うち棄てられた屋敷跡や道ばたの祠、はら遷に置かれた丸い石、開墾されずに残された畑のなかの樹木——それら一つ一つのモノたちを、民俗学者である著者は訪ね歩き、ふれあい愛おしみ、地霊として記録する。

しかし、これが地霊だと定義づけられるような、きちんとした姿や形式があるわけではない。共通しているのは、大地とつながり、大地の力を感じさせるモノたちであり、それらが存在するのにふさわしい場所と言えばいいか。突然もてはやされ、人が押しかけるパワースポットも地霊のひとつと言えようが、著

者が追い続けるのはもって地味な、土に生きる人びとの生活が感じられる場所だ。

そうした場所が、今棄てられようとしている。あるいは棄てられた。大地を傷つけて人は棲みはじめ、必要がなくなるで見棄てて去ってゆく。地霊はどうなるのかという思いが、著者を歩かせる。

環境やエコということばになぜかなじめない、という人にもぜひ読んでほしい。(岩波書店、3000円)